



企業訪問レポート

「計測」で世界のものづくりを支え、世界のしあわせに貢献する

日本計測システム株式会社 奈良県桜井市

日本計測システム株式会社は、今年で会社設立30周年を迎え、社名の示すとおり、モノに及ぼす力の大きさを計測する機器とシステムを、開発から設計、製造、アフターメンテナンスまで一貫して行っている。

同社は主に、ばね試験機、荷重試験機、トルク試験機の3つの分野を収益の柱としてきたが、農林水産省で介護食品における規格統一化に向けた動きがあるなか、食感を計測する「テクスチャーエネルギー試験機」を開発、さらに今年には、介護施設や病院向けに安価で使いやすい普及版「ケニアフードテスター」を発売し、今後新たな収益基盤に育っていくものと期待されている。

同社は、日本のものづくりの発展を支えてきた研究開発と品質管理の現場において、欠かすことのできない「計測」という分野で常にユーザーの視点に立ち、これからも「高精度で使いやすい試験機」をモットーにものづくりを支えていく。

会社概要



会社名：日本計測システム株式会社
所在地：奈良県桜井市大西526-1
電話：0744-46-5521
FAX：0744-46-5527
設立：1992（平成4）年12月
代表者：代表取締役社長 堀尾 洋介
資本金：1,500万円
従業員：34名
事業内容：計測機器の設計・製造・販売・アフターメンテナンス
URL：<https://jisc-jp.com/>



同社本社の外観

製造業の縁の下のチカラ持ち

計測機器の設計・製造・販売・保守を手掛ける日本計測システム株式会社は、奈良県桜井市において1992年12月に設立。創業社長の多山禎一氏が、自宅の駐車場を改装した工場でばね試験機の製作を始めてから、今年でちょうど30周年を迎える。試験機の性能の確かさや使いやすさがユーザーに評価され、「多山さんの言うことなら間違いない」と大変信頼を得て業容を拡大してきた。

2022年4月に就任した現社長の堀尾洋介氏は、10年あまり他社での経験を積んだ後、懇意にしていた人物の紹介で同社に入社した。ユーザーの利便性を追い求めて、技術者として製品開発に携わってきたが、今ではばね試験機の校正方法、検証方法を定めたJIS（日本産業規格）を策定する委員を務め、業界を牽引する。

かゆい所に手が届く計測機器

同社は、試験機のユーザーが直面している課題と真摯に向き合い、要望をタイムリーに反映し、機能の改善や品質の向上につなげている。新型コロナウイルス感染症の影響が長期化するなか、試験機に関する商談をはじめ、試験機やソフトウェアの操作方法、日常点検の方法の説明など、オンラインでの対応も行っている。

同社が手掛けるばね試験機の国内シェアは約70%を占め、関西では90%を誇る。国内・海外の比率は、国内向けが約60%、海外向けは中国や東南アジアを中心に約40%となっている。「ユー



同社のベストセラー、自動圧縮引張ばね試験機 PROシリーズ（左）
荷重とトルクを同時に測定するコンビネーションフィーリング試験機（右）

ユーザーからの圧倒的な信
頼を自社の英語表記
“JISC”に込め、ブ
ランド戦略を展開して



いる」と堀尾社長は話す。

代表的な製品であるばね試験機や荷重試験機は、モノのチカラを測定する核となるものである。ばね試験機の中でも、同社が設立された年に誕生した「自動圧縮引張ばね試験機 PRO シリーズ」は、現在も同社のベストセラーだ。「コンビネーションフィーリング試験機 (CFT)」は、ワイヤー や ウインカー のような自動車用部品など、荷重とトルクの両方を1台で測定できる試験機である。測定したトルクの値はパソコンの画面でグラフ状に一目瞭然で可視化される。「ねじ締付け試験機」は、ビルや橋桁などに使われるボルトの性能を測定する試験機である。「今は収益の柱に育っているが、ばね試験機や荷重試験機の開発には相当な苦労があった。製品化されて契約に至ったときは、非常に達成感を感じる」と堀尾社長の顔もほころぶ。これからも「かゆい所に手が届くものづくり」を支え、「かゆい所に手が届く計測機器」の開発に取り組んでいく。



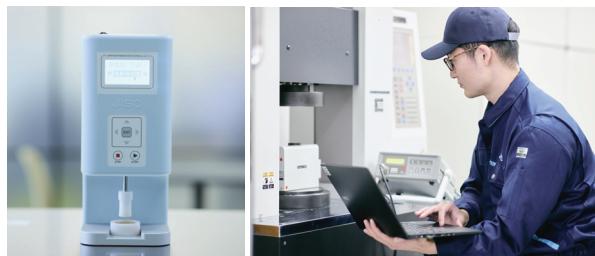
本社と営業所間のオンライン会議（左）
ユーザーの希望や課題に耳を傾け、製品開発に生かす（右）

「やさしい食事」づくりのお手伝い

2015年、農林水産省が介護食品の普及に向けて規格の統一化を目指し、「スマイルケア食」として新たな枠組みを整備したのに合わせ、同社は食感を計測して数値化する「テクスチャー試験機」を開発した。研究者向けで高性能であったが、非常に高価であることが難点で需要は限られていた。

そこで2022年、同試験機の普及版ともいえる「ケアフードテスター」の発売にこぎつけた。開

発の中心を担ったのは、30歳前後の若手社員たち。電源を入れればすぐに試験を始められ、操作も簡単な試験機で、オンライン販売も取扱うなど、食品の製造・提供の現場での使いやすさを意識した。日本語だけでなく英語、中国語、韓国語にも対応し、ゼリーや練り物食品など硬度が均等でない食品の硬度測定も可能である。「これまで、工業製品関係の試験機で実績を上げてきたが、今後は食品関係の試験機においてもシェアを伸ばし、将来的には、ばね試験機、荷重試験機、食品試験機の売上シェアを各々3分の1ずつにしていきたい」と堀尾社長は熱く語る。



食感の数値化を可能にした試験機「ケアフードテスター」（左）
定期的な校正点検で、試験機を最良の状態に保つ（右）

出荷後も責任を持ち、見守り続ける

同社への信頼の礎は、試験機の出荷後も責任を持って見守り続けること。試験機の品質を保証するため、試験機の精度・機能・動作などを確認する校正業務に非常に力を注いでいる。日本国外のユーザーが使用している試験機については、同社で教育を受けた現地代理店の担当者が校正業務を担う。同社は、世界で通用する信頼の証として、奈良県で唯一、JCSS（計量法校正事業者登録制度）の登録認定業者となっている。社内の業務は、営業や開発、技術、校正など多岐にわたるが、やはりどの部門においても人材の育成には時間がかかるようだ。従来は、他社で10年ほど在籍していた人材が中途入社するパターンが多かったが、最近は新卒採用も着実に増やしている。

社長交代を機に、企業理念を“「計測」で世界のものづくりを支え、世界のしあわせに貢献する”と新たに示した。堀尾社長の視線は、常に世界中のユーザーに向いている。（大橋 徹、刀祢善光）